

Desert Wind

● 二つのものの比較 ●

(コリント 4:16 - 18)

皆さんはミズスマシという昆虫をご存知ですか？池とか沼の静かな水面を素早く泳ぎ回る黒い豆粒のような昆虫です。このミズスマシの目は人間と同じ二つの目が一對になっていますが、ミズスマシは二対の目を持っているので、合計四つの目があることになります。しかし、なぜミズスマシには目が二対も必要なのでしょう。ミズスマシはいつも水面に浮かんでいて、水の上の空間と水の中の空間の境目に住んでいます。ですから、ミズスマシは二対の目をもって、一對の目で水の上の世界を見、もう一對の目で水の中の世界を見るのです。

同じように、クリスチャンも実は二対の目を持っています。一對は外なる世界を見るため、そしてもう一對は内なる世界を見るための目です。つまり、クリスチャンも、二つの世界に住んでいるのです。

「外なる人」と「内なる人」との比較

4章 16 節に、「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」とありますが、聖書によれば、クリスチャンの中には「外なる人」と「内なる人」という二人の自分がいるということです。この「外なる人」とは、年と共に体力も能力も衰えていく、生まれながらの自分のことです。それに対して、「内なる人」とは、キリストを信じる信仰によって霊的に新しく生まれ、神の子とされた自分、また永遠の命を約束された自分のことです。そして、生まれながらの「外なる人」は、時間と共に衰え、死に向かって進んでいきますが、この「内なる人」は、聖霊によって日ごとに新しくされ、清められ、永遠の恵みに向かって、日ごとに成長していくのです。そのために、クリスチャンは日々、聖霊に満たされ、魂の呼吸である祈りと、魂の糧である聖書の学びを忘れてはならないのです。

「今の時の軽い患難」と「重い永遠の栄光」との比較

4章 17 節で、「今の時の軽い患難」ということと「重い永遠の

栄光」という対比がなされていますが、聖書は、私たちが人生において経験する様々な患難は、やがて私たちが神様からいただく永遠の栄光に比べれば一時的であり軽いものだと言っています。この言葉は、私たちにとって大きな慰めであり、励まします。人は誰でも、人生において色々な患難を経験します。人によってその患難や試練の種類は違いますが、どんな試練もその人にとっては大変な問題であり大きな重荷です。しかし、聖書は、私たちが経験する地上での患難は、永遠から見れば一時的で、天国における恵みに比べれば取るに足りないものだと言っています。たとえ、一生涯、何かの重荷を負い続けなければならない役割を神様にいただいたとしても、その苦勞とは比較にならないほどの永遠の栄光を、神様はやがてあなたに与えて下さるのです。その事実が解かれれば、患難の只中にありながらも、今までとは全く違う天国の視点から現実を解釈することができ、感謝と喜びと希望の中で生きることができるのです。

「見えるもの」と「見えないもの」との比較

4章 18 節に「見えるもの」と「見えないもの」という表現があり、「見えるもの」は一時的であり、「見えないもの」はいつまでも続くとなります。この「見えるもの」とは、私たちの周りにある五感で感じ取ることのできるものです。しかし、それらは時間と共に過ぎていくものです。ところが聖書は、「見えるもの」がすべてではなく、「見えないもの」があり、その「見えないもの」こそ永遠に続くもので、そこに私たちの心の目を向けなければならぬと教えるのです。この「見えないもの」とは、神の国、永遠の命、神の導き、また神様ご自身です。見えないものは見る対象ではなく、信じる対象であり、信じることによって、心の目で見えるようになるという実に不思議な信仰の世界です。この世界が解けると、たとえ私たちの目に見える状況がどんなに困ったように見えるものであっても、神が意図しておられる、見えない神の計画を、もう一對の目で見ることができるのです。

LVJCC 牧師：鶴田健次

DREAMS COME TRUE

- ☞ 教会堂の建設
- ☞ 敬老ホームの設立
- ☞ 幼稚園の設立

お祈りのリクエスト

日本の家族の救いのために

各スモールグループのオikos伝導のために

入門者クラスのために
(華子姉、とよ子姉、田中兄)

英語部の働きのために
小さな子供を持つお母さん方のクラスのために
(香織姉担当)

癒しの祈り：神崎先生の目、倉田一徳さんの脳腫瘍、新井雅之兄の癌、田口シャロン兄、夕紀子姉の緑内障、美津子姉、かよこ姉、さおり姉、Mary 姉、以津子姉、美佐江姉、エナちゃん

Desert Wind では 1400 字程度のお証、また質問を募集しています。ご意見・質問等何でもどうぞ。

lvjccnews@hotmail.com
編集：真子ガーディナー 松岡みどり

— イスラエルの歴史 ② —

・ 離散後のユダヤ人とタルムードの成立

2世紀のバル・コクバの乱に失敗したユダヤ人は、ついにイスラエルの地から追放され、その後、エルサレムは「アエリア・カピトリナ」と改称され、ユダヤの地は「パレスチナ」と改称されました。また離散を余儀なくされたユダヤ人は、ヨーロッパ、中東、北アフリカなど、地中海周辺の国々に移っていきました。そして、それらの地で、彼らの生活・信仰の規範となる法典「ミシュナ」が2世紀頃に、さらにその注解である「エルサレムタルムード」が4世紀末に、また「バビロニアタルムード」が5世紀末に編纂されました。またユダヤ教は、かつての神殿礼拝ではなく、ラビの指導による聖書やミシュナ及びタルムードの研究解釈というシステムを確立していきました。また各地に祈りの場としてのシナゴグを建設し、ユダヤ教の信仰と民族のアイデンティティを守り続けました。特に、「安息日を守る、割礼を行う、食事規定」といった厳しい戒律は、他宗教との軋轢を生んだものの、彼らが他民族と同化して消えてしまうことを防ぐ役割を果たしました。

・ キリスト教とイスラム教

313年にローマ帝国のコンスタンティヌス帝によってキリスト教が公認され、以後パレスチナは4世紀からキリスト教国家ビザンチン帝国の統治下に入ります。キリスト教が公認されると、ユダヤ人たちは「キリスト殺しの犯人」という名目のもと、様々な迫害を受けます。

7世紀半ばから13世紀まで、西アジアから北アフリカ、南ヨーロッパ一帯を、イスラム教帝国が支配しました。またマホメットがエルサレムで昇天したとされたことから、エルサレムはイスラム教の第3の聖地となり、エルサレムの神殿跡にはイスラム教の寺院が建てられました。これが現在の「黄金のドーム」です。

こうして、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、いずれも神から与えられた約束の継承者が自分たちだと主張する図式が出来上がりました。

・ 十字軍

11世紀になると、キリスト教徒たちは「異教徒からの聖地奪還」を目指した十字軍を始めます。異教徒とは

は、直接的には当時パレスチナを支配していたイスラム教徒を指していましたが、それにはユダヤ人も含まれていました。ですからキリスト教徒たちは、聖地に行く途中で、多くのユダヤ人を殺害しました。1099年、十字軍は聖地エルサレムに到着し、エルサレムや周辺の街々では多くのイスラム教徒とユダヤ人が虐殺されます。

この後、ユダヤ教徒とキリスト教徒の交際が禁止され、ユダヤ人に対する公職追放令が出され、わずかに選ぶことのできた職業の一つが、汚れた職業とされていた金融業でした。

・ ユダヤ人迫害の歴史

13世紀になると、ユダヤ人たちはさらに自由を制限され、スペインなどでは、改宗するか他国に移住するかを選択を強要されました。やむを得ずキリスト教徒となったユダヤ人もいましたが、彼らはマラノ(スペイン語で豚の意)と呼ばれ、改宗後も侮蔑と差別の対象となり続けていました。また、カトリックは異端審問制度を確立させ、ユダヤ人が少しでもユダヤ的な風習を守ったり、ユダヤ教で禁止されている豚を食べなかったりするだけで、残酷な刑罰が科せられました。13世紀後半からは、ユダヤ人を追放しなかった国々でも、ユダヤ人隔離の政策を取るようになり、各地で後に「ゲットー」と呼ばれるユダヤ人の隔離住居区が作られます。

・ ユダヤ人の解放と反動

しかし、1789年のフランス革命の後、フランス議会でユダヤ人にも平等の権利が認められるようになります。その後ゲットーが解放され、その流れはヨーロッパ各地へと広がって行きました。各地のゲットーは解体され、職業選択も規制を解かれ、各界にユダヤ人が進出し、ユダヤの社会構成も激変していきました。これを啓蒙運動「ハスカラ」と言います。しかし、現実的にはユダヤ人への差別は解消されず、反ユダヤ主義と民族主義のもと、かえってひどいユダヤ人迫害が各地で起こります。ロシアでは、1881年からポグロムと呼ばれるユダヤ人大虐殺が何度も起り、犠牲者は数十万人に及んでいます。また1894年、フランスのユダヤ人士官アルフレッド・ドレフュスが、スパイ容疑で逮捕される「ドレフュス事件」が起こります。これは彼がユダヤ人であったため、犯人にでっちあげられた冤罪事件でした。(続く)



編集室 便り

ハレルヤ、今日は、友人の実話を紹介したいと思います。友人は、日本で数年間の伝道活動後、TN州にある神学校に通っています。その傍ら、夜はレストランのアルバイトから、生活費を捻出しています。ある日、作中に、外が騒がしいので出てみると、彼の古い車から突然、火がでており、消防の方が鎮火作業中でした。それにもかかわらず、車は全焼してしまいました。しかし、彼は、「なんと幸せなことが、先日片道10時間もかけてのNC州への旅は安全に守られた事、周りの車にも被害が及ばなかった事」を感謝をしたそうです。その後、彼の通っている教会の牧師にその話をした所、最近ある教会メンバーが亡くなり、その方の使っていた車を買える事になったそうです。「主の山に備えあり」(創世記22:14)